

野良着の生活史
-民俗服飾の近代化と民族衣装の創出に関する学際的比較研究-
Life History of Field Clothes
-Comparative Research on Modernization of Folk Costume and Construction of National
Costume-

糸林 誉史*¹, 林 在圭*²⁺, 高田 知和*³⁺
Yoshifumi Itobayashi*¹, Jaegy Lim*² and Tomokazu Takada*³

*1 文化女子大学服装学部 東京都渋谷区代々木 3-22-1
Faculty of Fashion Science, Bunka Women's University
3-22-1 Yoyogi, Shibuya-ku, Tokyo, Japan

*2 静岡文化芸術大学文化政策学部
Faculty of Cultural Policy and Management, Shizuoka University of
Art and Culture

*3 東京国際大学人間社会学部
Faculty of Human and Social Sciences, Tokyo International University

+ 服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学
Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture,
Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract : The aim of the present research was to make assumptions about folk costume worn in working environment in three different regions, namely Okinawa, Korea and Malaysia. The meaning assigned to these folk costumes was examined with reference to the structure of their society.

はじめに

本研究の目的は、ハレ着としての「キモノ」に対して、ケの仕事着であった「野良着」を対象として、「民俗服飾」にとって近代化の持つ意味を、家族・共同体の変容との関連から、生活史法による比較により学際的総合的に明らかにすることである。具体的には、第二次世界大戦後、特に高度経済成長期以降の日本・韓国・マレーシアの木綿・麻布等の民俗服飾である野良着を対象として、生活史調査を行いつつ、その近代化の過程を広く文化の客体化やフォークロリズム的現象であると捉え、その裏に潜んだ文化ナショナリズム的背景と、それと現場で対峙せざるを得ない自治体側の論理の両面から、現代アジアの「民俗服飾」研究に纏わる諸問題を提起してみたい。

沖縄・韓国・マレーシアの予備調査

平成 20 年度は、上記の研究計画を実施するための予備調査を、沖縄、韓国、マレーシアにおいて実施した。また、次年度の本調査に向けた共同研究会を開催し、予備調査で得られた知見と文

*1) itobayashi@bunka.ac.jp

献による先行研究を照らし合わせ、野良着研究の課題について明確化した。

(1) 沖縄

沖縄では、かつて東アジア諸地域から織物に関する多様な技術が伝わり、それを各島それぞれの地域において吸収・消化することで独自の織物が作られて来た。それらは今日では、「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」（いわゆる「伝産法」）に基づいて経済産業省によって伝統的工芸品に指定されるにいたっている。具体的には久米島紬、宮古上布、読谷山花織・読谷山ミンサー、琉球絣、首里織、琉球紅型、与那国織、喜如嘉の芭蕉布、八重山ミンサー・八重山上布などである[1]。本研究では、それらの沖縄の伝統的な織物について、地域社会や組織との関連から今日的な意味を再検討していくことを目的としている。

今年度は、次年度に行なう本調査のための予備調査を行なった。具体的には、2009年3月6日から11日まで、共同研究者の三名が沖縄本島と宮古島に滞在して、以下の施設を訪問・調査した。

- ・ 「宮古伝統工芸品研究センター」、「宮古織物事業協同組合」
- ・ 「西原織物」（池間吉子氏の工房）
- ・ 宮古島市博物館（以上、宮古島市）
- ・ 沖縄県立博物館（那覇市）
- ・ 「読谷村伝統工芸総合センター」、「読谷山花織事業協同組合」（池原竹子理事長・又吉弘子副理事長と面談）（中頭郡読谷村）
- ・ 「琉球かすり会館」
- ・ 「大城廣四郎工房」（以上、島尻郡南風原町）
- ・ 「大宜味村立芭蕉布会館」（国頭郡大宜味村）

これらはそれぞれ、近代以前において貢納布として生産されていた宮古、やはり琉球王朝の御用布として指定され家内工業化していたものの、明治中期以降は完全に衰退していたのを昭和40年代になって復興せしめた読谷、南風原町と八重瀬町ではほぼ100%を生産している琉球絣、かつては沖縄各地で織られていたものの、今日では大宜味村喜如嘉のみで織られている芭蕉布といった特色がある[2]。

私たちは、これらの織物の持つ地域性という点にも注目して、例えば読谷村楚辺[3]や大宜味村喜如嘉[4][5]といった織物の里のシマ社会との関連性にも留意することでこれら伝統工芸品の由来にも配慮しつつ、次年度は具体的な調査を敢行していきたいと考えている。

(2) 韓国

韓国における衣生活は、とくに庶民の服飾は王朝の盛衰とはかかわりなく、韓国固有の基本的形態をそのまま維持されてきたとみられる。庶民における韓国固有の基本的な形態とは、「チマ・ジョゴリ」あるいは「バジ・ジョゴリ」と呼ばれ、上に着る「ジョゴリ」と下に着る「チマ」（女性）か「バジ」（男性）からなる衣袴分離の衣服である[6]。この「チマ・ジョゴリ」あるいは「バジ・ジョゴリ」が韓国固有の服装として「韓服」と呼ばれる。こうした「韓服」の衣袴分離の基本構造は、長い歴史のなかで変わることはなかった。

一方、韓国は四季が明確に区別され、気候の変化が激しいため、「ホッオッ」（一重のもの）・「ギョブオッ」（裏地のついたもの）・「ソムオッ」（綿入れのもの）があって、「ホッオッ」は夏の服として、「ギョブオッ」は春秋服として、そして「ソムオッ」は冬服として好んで着ていた[7]。また、その生地素材としては、庶民の衣服は夏には主に「サムベ」（麻）か木綿を好み、春秋には木綿を好み、冬には木綿に綿を入れて刺し縫いをしたものを好んで着る[8]。他方、富裕層の人々は、夏には麻か「モシ」（苧麻）を好み、冬には「ミョンジュ」（絹）に綿や毛を入れて刺し縫いしたものを好んで着ていた[9]。

しかし、開花・植民地期を経るなかで化学繊維による洋服が導入され、韓服と洋服が混在した。そのため、韓服は平常服としての機能を後退させ、儀礼服としての機能に限定されるようになってきた。と同時に、1930～1940年代までは、衣服は各家庭の主婦の手で手織りによって作られていたが、解放後に手織りは急速に衰退し、保護の対象になってくる。その最も有名なのは、国の重要無形文化財第14号の「韓山苧麻織り」（1967年指定、苧麻織り）、国の重要無形文化財第28号の「羅州の木綿ナイ」（1969年指定、木綿織り）である。そのほかに、慶尚北道の重要無形文化財第1号の「安東布」（1975年指定、麻織り）などである[10]。

- ・ 「韓山苧麻織り」：忠清南道舒川郡韓山面芝峴里
- ・ 「羅州の木綿ナイ」：全羅南道羅州郡多侍面東堂里
- ・ 「安東布」：安東市西後面苧田里

とくにこのうち、分担者の林がこれまで社会調査を行ってきた忠清南道の韓山面における「韓山苧麻織り」の共同本調査に向けて、苧麻織りの歴史的沿革とともに韓国社会の変容を追いながら、韓国における野良着の生活史について探っていくことにしたい。

（3）マレーシア

ソンケツ(kain songket)は、背景となる布の綾地または襦子地に、絹糸あるいは綿糸の緯糸とともに、金糸・銀糸などの金属糸で刺繍をして浮織模様を表した絹織物(brocad)の一種である[11]。マレー語で、'menyongket' というと、金銀で刺繍をするという動詞になる。本研究の目的は、マレーシア各地の伝統的な織物業が、経済のグローバル化、都市化や新中間層の成長、あるいは消費文化の中で、どのように変化してきたかを、地域社会の再構築の様相とともに明らかにすることである。

2009年2月16日から21日まで、研究代表者の糸林がマレーシアとシンガポールの下記の施設を訪問した。

- ・ 工芸博物館 (Balai Getam Guri)
- ・ ミナ・ソンケツ工房 (Che Minah Songket) 代表のカメル・フセイン氏と面談
- ・ ビダッ・ソンケツ工房 (Wisma Songket Hajja Cik Bidah) (以上、クランタン州)
- ・ 工芸文化センター (Pusat Budaya Craft)
- ・ ビバッ・ソンケツ工房 (Bibash Songket) 代表のハビバッ・ジクリ氏と面談 (以上、トレンガヌ州)
- ・ シンガポール国立博物館、東南アジア研究所 (シンガポール)

なお東南アジアの伝統的な染織産業については、インドネシアを中心としたバティックやイカ

ットを中心に 1940 年代から研究[12] [13]されてきたが、マレーシアなどのソンケツについては、美術工芸品としての研究[14]がほとんどであり、現地の研究者(Maznah 1996)[15]による 1980 年代半ばまでの伝統工芸産業を扱ったものがみられるだけである。

おわりに

アジアにおいて「民俗服飾」の近代化の過程は、同時に国民アイデンティティを求めての「民族衣装」創出の過程であった。たとえば、数ある日本の服飾から、なぜ「キモノ」が選ばれて日本の民族衣装となったのであろうか。本研究の目的の解明のためには、各国における洋装化、消費社会化への変化の中で、人々の「伝統文化」の解釈と実践の過程の詳細な検討が必要となる。

次年度の本調査においては、フィールドワークを基礎とした生活史法に基づき分析するが、文化の客体化論やフォークロリズム論の視点を導入することで、より問題を明晰化する。その際には、特定の個人の生きられた記憶のなかの衣生活と家族・共同体の変容の実態の解明だけではなく、地方史や産業史としてみた農村開発の論理や過去との連続性を求める思想にまで立ち入って分析を試みたい。

文献

1. 権修珍：「沖縄県伝統的工芸品産業の現状に関する考察」：『政策科学』Vol.11,No.1,pp.76-77(2003)
2. 沖縄県観光商工部商工,2008,pp.54-65 振興課編集発行：『平成 20 年度 工芸産業振興施策の概要』
3. 読谷村役場：『輝く読谷山花織 その復興に情熱を傾けた二人』,読谷村役場,1997,p.39
4. 喜如嘉誌編集委員会編：『喜如嘉誌』,喜如嘉誌刊行会,1996,pp.211-231
5. 平良豊勝：『喜如嘉の民俗』,沖縄療友会印刷部,1970,pp.67-71
6. 金子文子著・金井塚良一訳：『韓国服飾文化の源流』,勉誠出版 1998
7. 金英淑編著：『韓国服飾文化事典』,図書出版美術文化,1998
8. 国立国語院編,三橋広夫・趙完済訳：『韓国伝統文化事典』,教育出版 2006
9. 柳喜卿・朴京子：『韓国服飾文化史』源流社 1983
10. 高麗大学民族文化研究所：『韓国民俗大観 2：日常生活・衣食住』,高大民族文化研究所出版部,1980
11. Rodgers S, Summerfield A, Summerfield J, *Gold cloths of sumatra : Indonesia's songkets from ceremony to commodity*, Netherlands: KITLV Press, p.1,(2007)
12. Barnes, R: *Textiles in Indian Ocean Societies..*Londo,: Routledge,198pp,(2005)
13. Uchino, M: “Socio-Cultural History of Palembang Songket..” *Indonesia & the Malay World* , 33:205-223 (2005)
14. Maxwell, R.:*Textiles of Southeast Asia: Tradition, Trade and Transformation,..*Singapore : Periplus,432pp.,(2003)
15. Mohamad, M: *The Malay Handloom Weavers: A Study of the Rise and Decline of Traditional Manufacture*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, pp.1-47 (1996)